観察者と保育者の対話 (7)

観察者から保育者へ

観察者　久保健太（東京大学大学院）

かつて「空き地」や「道」で展開されていただろう豊かな遊びが、そのまま放課後の学校に残っていたのは新鮮な驚きでした。石やら、虫やら、ボールやら、ヒモやら、遊び心をくすぐるものさえあれば、今だって子どもは遊ぶんだ、ということを知った一日でもありました。

「離れ」わざ

僕が子どもたちと一緒に体育館でバスケをして遊んでいた（観察すべく努力しましたが、この時点では、努力むなしく、遊び仲間の一人になっていました）時のことです。誰かが倉庫からフラフープを持ってくると、子どもたちは犬ぞり遊びを発明しました。つまり、フラフープの片側にそりに乗ったエスキモーよろしく一人の子が体育座りをし、それを三、四人の「エスキモー犬」の子が引っ張ります。三、四人の子で一人の子を引っ張れば、それなりのスピードが出るので、彼・彼女らはしばらく、子どもたちだけで犬ぞりを楽しんでいました。しかししばらくして、そのスピードに飽きてくると、もっと速い「エスキモー犬」にそりを引っ張らせてみようとたくらんだようで、僕をつかまえ、そりを引くよう頼んできました。

僕がエスキモー犬に加わると、犬ぞりが未体験のジェットコースターに変わったようで、そのスピードは、引っ張られる子がフラフープを離さないようにしがみつくのに必死なほどです。引っ張られる子は、大喜びしながら、猛スピードのフラフープに仰

向け・腹ばいになりながら、しがみついています。未体験ジェットコースターには行列ができ、僕は、四、五人を引っ張り、くたくたになっていました。

一方その間、下浦先生は何をしていたかというと、先ほどまで、体育館の壁際にターザンロープをこしらえ、子どもたちと遊んでいたと思っていたのに、今は体育館の反対側で別のグループの子たちと野球を始めています。その間も、反対側では下浦先生のこしらえたターザンロープで、子どもたちが遊んでいます。

かたやフラフープジェットコースターは、エンジンである私の燃料切れと同時に閉業し、それと同時に、子どもたちも遊び終了です。僕はターザンロープで遊ぶ子どもたちを見ながら、下浦先生との差を感じ、「オレはダメだなあ」と思っていました。

つまり、下浦先生は遊びの手本を見せて、子どもたちが自分たちでやり始めたら、もう子どもたちだけにやらせています。かたや僕は子どもたちだけに遊びを任せることに「失敗」しています。遊びを子どもたちに任せて、自分はそこからうまく離れられるかどうかが違いなのでしょうが、その「離れ」わざは簡単なものではないはずです。

自由・責任・ガキ大将

下浦先生が「ガキ大将」であるのに対して、僕は「ガキ」、彼・彼女らの遊び仲間の一人です。その違いは何に由来するのでしょうか。

スタッフミーティングも終わったスタッフ室で、僕が「自分は『ガキ大将』というより『ガキ』なんです」と言うと、下浦先生は「『ガキ大将』『ガキ』ってのは性格として決まってるもんじゃないんだよ」とおっしゃいました。「子どもたちの自由な遊びを守るという責任というか、使命感というか、そういうものが『ガキ大将』の条件なんだよ」と。

自由にただ身を置くだけなのか、その責任を取ろうとするのか、そこにガキとガキ大将の違いがあるということです。

しかし、「ガキ大将」は、「大将」である前に「ガキ」じゃなくてはいけない。つまり、責任という大人の論理をもつだけでは「大将」にはなれても「ガキ」にはなれないのではないでしょうか。同様に、遊びのルールづくり、ケンカの調停の際に、大人の論理で「大将」になろうとしちゃ「ガキ大将」にはなれません。

保育者から観察者へ

保育者　下浦忠治（品川区　鈴ケ森すまいるスクール）

子どもたちの「生活」は待ったなし

従来の学童保育を廃止し、留守家庭児対策を「すまいるスクール」という名の全児童対策事業の中で実施している東京都品川区。そのスタイルは、いわば二〇〇七年度からスタートした「放課後子どもプラン」の放課後子ども教室事業と放課後児童健全育成事業（学童保育）を一体的に運営するひとつの先行事例ともいわれるものです。

私が勤めるすまいるスクールには日々一五〇人もの子どもたちが参加しています。その大半はすまいるスクールを放課後の生活の場として帰ってくる低学年児童です。

大人に依存しながら成長していくその過程にある子どもたちは、いろいろな面でまだまだこれからという子どもたちです。それだけに安定的かつ継続的に安心できる放課後生活を保障していくには、一人ひとりの思いを受け止めながら、生活面での援助や遊びのサポートをしていくことが大切なかかわりになってきます。とりわけ、自分の思いを言葉にして

伝えるコミュニケーション力が育つ途上の子どもたちですから、人と人との関係性に寄り添い、見守ることは指導員の大事な役割といえましょう。

安心できる関係性がないと居場所にはなりません。楽しいという実感を共有できないと、「明日もね」とはならないからです。

自ら「すまいる」に行きたいと思えるには、そこに心から湧き出る「やりたいと思える遊び・活動」と、それを一緒にやりたいと思える安心できる仲間の存在が必要です。

このことを一人ひとりの中に保障していくことが「いやがらずに毎日通える生活」を保障していくことにつながるのです。

しかし、現在の「毎日固定しない大規模集団」と指導員体制（たった一人の専任も学童保育の専任ではなくすべての児童に責任をもつ「兼務体制」であり、非常勤スタッフも一年ごとにころころと代わるローテーション勤務）では、こうしたかかわりを大事にすることが非常に困難なのです。

とはいえ、子どもたちの生活は待ったなしです。「受け入れ側の保育体制が不十分だから、子どもが安心して楽しめなくても仕方ない」では済まされません。

「観察者」が見たひとこまは、苦悶しながらも、学童保育の役割を果たすことにこだわりをもって子どもたちにかかわる指導員の姿だったわけです。

いくつもの対応を同時進行で

観察者の久保さんが〝「離れ」わざ〟と見てくださった場面についてですが、すべての子どもたちの生活に責任をもつ立場の私たち指導員は、いつでもいくつもの声に耳を傾け、その子その子の思いの実現に援助の手立てが講じられるよう心のエネルギー

を使っています。もちろんそれだけのフットワークも求められます。

ここでは、ターザンロープの遊びが安全に展開されていくことを見通した私は、気になっていたK君のいる野球のほうへ身を移したのです。

身の置き所と心の置き所という点では、身はロープ遊びの準備をしながらも、心は四年生のY君に「野球入る？」と誘われていたK君のほうに向いていました。なぜなら二年生のK君は異年齢のグループで野球をやったことがなく、ぜひこの時をチャンスに経験してほしかったからです。これまでの彼は、いつも決まった同学年の気心知れた友達二人ないしは三人でしか野球（というより、バッティング遊び）をやってこなかったのです。その友達の姿がないこの場面でK君はどうするだろう？　と私は興味津々で見ていました。

私のほうからはあえて声はかけずに見ていました。それは私に促されて仲間入りするのではなく、K君自身の決断を見守りたかったからです。「うん、やる！」と仲間入りしたのを見て、私は審判＆キャッチャー役として身を置いたのでした。下心としては、雰囲気を盛り上げながらK君や同じくメンバーに加わった一年生のSちゃん（女の子）がすぐやめることなく「またこんどもやりたい」と思えるようにつなぐことを考えていました。

子どもは「へたでも何も言われないんだ」と安心が実感できた時、「またやってみたい」と思えるものです。そうした安心の関係を紡いでいく土壌づくりのひとこまだったのです。

もちろん、この時の私は、先ほどとは逆に、身は

野球グループに置きながらも、目はターザンロープのほうに向いていました。なぜならつねに安全確認を要する遊びだからです。

「ガキ大将」

指導員は時には親、時には遊びのサポーターと、多面的に子どもたちと向き合い、その役割を担っているものですが、確かに時には「ガキ大将」ということもありますね。

私たち指導員が子どもと一緒に遊ぶのは、場面場面で見せる子どもの表情、しぐさ、つぶやきなどさまざまなその子の「表現」から、その子をわかろうとするひとつの手立てでもあります。

子ども同士の中で、その子の思いが出せているか、楽しいと共感できているか、一人ひとりをよく見てないと、援助することも働きかけることもできないのですから。

それと私は、「すまいるスクール」が学校から一歩も出られない事業だからこそ、「学校の秩序より放課後の雰囲気」を大事にしたいと思ってきました。そのひとつとして子どもと指導員の距離間があると思うのですが、私は指導員の前でその子のありのままが出せる時空間であってほしいと願ってきました。大人が管理的立場で子どもに対するところでは、ありのままの姿はでてきませんし、子どもたちの「心のよりどころ」となる存在になれませんから。

楽しさや悔しさを共感し合えるところに身を置きながら、子どもたちの願い、心の葛藤、ちょっとした変化を見極め、気長に焦らず、あきらめず、見守ったり、手を貸したり、励ましたり、共に喜び合ったり、時には叱ったりいろいろなかかわりが求められるのが指導員です。

そうしたかかわりが子どもたちの安心の実感に結びついていると思っています。